

SSS032-P09

会場:コンベンションホール

時間:5月25日 16:30-17:30

## 会津盆地東縁断層帯南部における新たな断層変位地形の認定 Tectonic Geomorphology of the southern part of eastern marginal fault zone of Aizu Basin, Northeast Japan

水本 匡起<sup>1\*</sup>, 田力 正好<sup>1</sup>, 松田 時彦<sup>1</sup>, 吾妻 崇<sup>2</sup>, 堤 浩之<sup>6</sup>, 今泉 俊文<sup>3</sup>, 池田 安隆<sup>4</sup>, 宮内 崇裕<sup>5</sup>, 松浦 律子<sup>1</sup>  
Tadaki Mizumoto<sup>1\*</sup>, Masayoshi Tajikara<sup>1</sup>, Tokihiko Matsuda<sup>1</sup>, Takashi Azuma<sup>2</sup>, Hiroyuki Tsutsumi<sup>6</sup>, Toshifumi Imaizumi<sup>3</sup>, Yasutaka Ikeda<sup>4</sup>, Takahiro Miyauchi<sup>5</sup>, Ritsuko S. Matsu'ura<sup>1</sup>

<sup>1</sup>地震予知総合研究振興会, <sup>2</sup>産総研 活断層・地震研究センター, <sup>3</sup>東北大学大学院理学研究科, <sup>4</sup>東京大学大学院理学系研究科, <sup>5</sup>千葉大学大学院理学研究科, <sup>6</sup>京都大学大学院理学研究科

<sup>1</sup>Earthquake Reserch Center, ADEP, <sup>2</sup>AFERC, AIST, <sup>3</sup>Tohoku Univ., <sup>4</sup>Univ. of Tokyo, <sup>5</sup>Chiba Univ., <sup>6</sup>Kyoto Univ.

会津盆地東縁断層帯は、耶麻郡北塩原村から会津若松市を経て南会津郡下郷町にかけて、約49kmにわたって南北走向に延びる断層帯である。同断層帯は、会津盆地東縁を限る北部（会津盆地東縁断層）と山地内を通過する南部（大内-倉村断層、下郷付近の断層）に区分されている。同断層帯の長期評価では、北部と南部が同時に活動する可能性があると考えられているが、会津盆地東縁断層と大内-倉村断層との間にはやや大きな不連続が存在していること、大内-倉村断層以南では断層の活動性を示す情報が得られていないことから、断層帯南端の位置認定には大幅な不確かさを伴うとされている（地震調査研究推進本部地震調査委員会、2008）。本研究では、会津盆地東縁断層帯南部について、空中写真判読及び現地での地形観察調査を行ない、以下に述べる新たな断層変位地形を見出した。

下郷町の南東、加藤谷川が西流する音金集落付近では、段丘面を横切って南北方向に延びる西向きの崖が認められる。崖は撓みの形態を有しており、ここに東傾斜の逆断層が存在すると判断される。この活断層は、先行研究に示されておらず、かつ、既存の断層トレースとは離れて存在することから、「音金断層」と新称する。音金断層は、加藤谷川左岸において、観音川岩屑なだれ堆積物（17ka：山元、1999）とほぼ同時期に形成されたと考えられる段丘面を上下方向に5m程度変位させている。また、同河川の右岸では、より下位の段丘面を上下方向に1.7m変位させていることから、変位の累積は確実である。加藤谷川より北方に延びる推定部分も含めると、音金断層の長さは約9kmと見積もられる。

下郷付近の断層では、北東端の約1kmの区間（塩土付近）において、観音川岩屑なだれ堆積物よりも新しい段丘面に変位の累積が認められることから、その存在が確実とされている（中田・今泉編、2002）。本研究では、中田・今泉編（2002）が示した活断層トレースの南延長で、北東端の区間と同様に変位の累積を示す断層変位地形を確認した。これによって延長される長さはわずか（100m程度）であるが、下郷付近の断層が累積的な活動を繰り返してきた活断層であることを示す証拠が加わったことになる。

大内-倉村断層では、中田・今泉編（2002）が推定活断層を示しており、活断層であることを示す変位地形の存在は明らかでない。本研究では、南方の中山峠付近において、東に広がる扇状地面上に逆向きの崖や凹地の存在を確認した。また、北方の大内宿付近には、断層変位地形の可能性のあるバルジ状の地形が存在することを示した。これらの地形は、大内-倉村断層が活断層である可能性を示唆していると考えられる。

本研究により、下郷町南東において長さ9kmの音金断層が新たに認定された。また、下郷付近の断層に沿って、変位の累積を示す断層変位地形が見出された。したがって、会津盆地東縁断層帯の南部は、累積的な活動を繰り返してきた活断層によって構成されていることが明らかである。音金断層を含めると、断層帯全体の長さは従来よりも4km延長されて53kmになる。今後は、本断層帯を構成する活断層の活動履歴を明らかにするための情報を収集するとともに、各断層間の不連続部に注目しながら一度の地震で動く範囲を検討する必要がある。

（広島大学名誉教授の中田高先生と広島大学の後藤秀昭先生には有益なコメントをいただきました。記して感謝申し上げます。本研究は文部科学省委託研究費により実施しました。）

キーワード: 活断層, 会津盆地, 下郷町, 音金断層

Keywords: Active fault, Aizu Basin, Simogo town, Otogane fault